

産消連帯と非営利・協同農園

高齢者農園への展望

古谷 直道 (東京都/労協連センター事業団・副理事長)

食と農に関する価値観

蜜柑の季節がまたやってきました。今年も無茶々園の蜜柑の産消連帯事業に向けて準備を開始しています。昨年は、初めてのことであったので、センター事業団内部においても若干の戸惑いがあったように思われます。値段を決めて蜜柑の普及促進を始めたところ、直ちに「高い！」との声が猛然と帰ってきた。見本の試食、それから第1回目の配送が終わるころになると「美味しい！」との評判がしきりとなる。やがて、知人友人に送った蜜柑の評価が「美味しい！君たちはいい事しているな！」と「誉められる」ことになる。無茶々園が誉められることが自分の事のように嬉しくなる。そして、「この蜜柑は、この値段でも高くないんだ！」と変わっていく。

食と農の事業や運動を進めるに当たって、最初に気になることは、自分たちの食に対する価値観あるいは食材を手に入れたり食事を選んだりするときの選択基準が、この半世紀程の間に作られた社会の仕組みの一部として、またそれに対する反応や反抗として、自分の中に、一人ひとりの心の中と生活スタイルの中に据え付けられているという事です。私自身についていえば、おおまかに言って、3つ程の基準があるように思えます。

- A=短期的な損得勘定(面倒くさくない、質はそこそこ、安い)
- B=ほんもの欲求(安心安全、旬、美味しい)
- C=生産と消費の信頼・連帯(自分が作った、仲間が作った、地元、国産)

昨年の無茶々園の蜜柑の場合には、短期間に価値基準の大勢がA→B→Cと移り変わった、その際、ほんもの欲求とくに「美味しい」が鍵を握っていた、といえるのではないのでしょうか。このような価値観の動きは、消費者が「農」に「よい食材」を求めるといふ範囲でいえば、なるほどと理解出来ます。しかしこれだけでは、生産者の側は消費者と本当の関係を結んでいない。「おれたちのことはわかんねだろうな」ということになるのではないのでしょうか。だから、センター事業団が「人と地域が必要とする仕事」として「農」に取り組むためには、もう一步の前進が必要なのではないか、という気がしています。上記の価値観C：生産と消費の信頼・連帯をさらに進めて、価値観D：「農を食糧供給機能としてだけでなく、環境保持の原点、我々の文化の根源維持という価値をもつものと認め、農を貴ぶ」という領域に入っていく必要があるのではなからうか、と思っています。

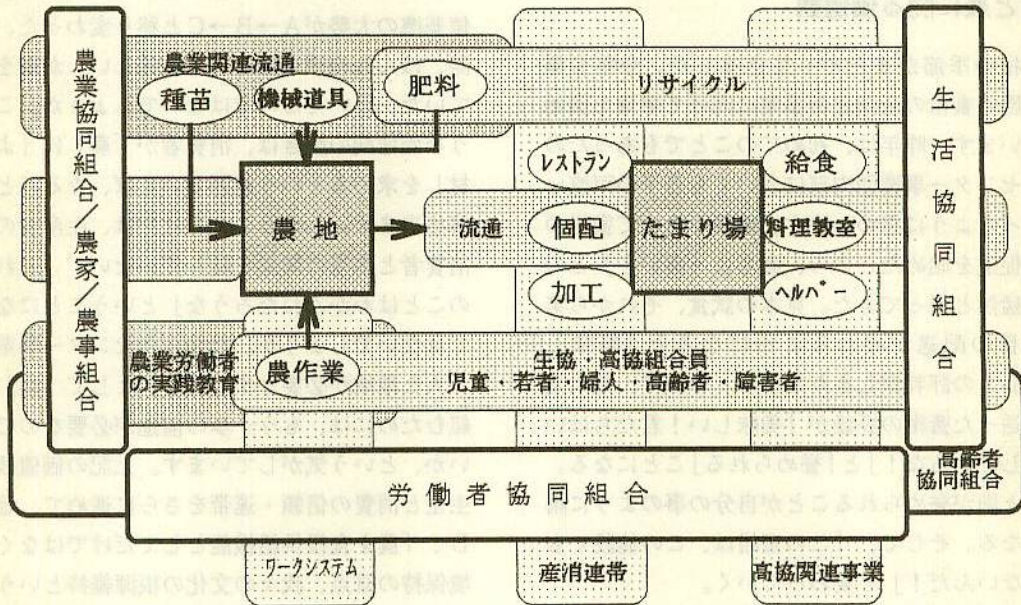
非営利・協同農園のモデル

金沢市近郊野々市において、(株)ポリトロニクス の笠野さんと兼業農家の五香さんが始めた漢方有機米の試作実験も3年目を迎えます。昨年は、石川生協の鶴来食堂(センター事業団石川事務所が運営受託)で「おいしい」と好評で、今年も2トンが供給されることになっています。この間、五香さんとは、地元産業の空洞化や農業経営の難しさについて話をし、都市近郊での我々の農園を構想してみることにしました。その概要は以下のと

おりです。(下図)

- ・農地とたまり場という、二つの場所を舞台として農園を構想する。
- ・農地では、米だけではなく、農家が自分用に栽培している方式(無農薬有機露地栽培)による地元野菜を対象とする。農作業は、農家・地域住民・生協と高齢協の組合員がワーカーズ方式で行う。
- ・たまり場では、高齢者がさまざまな活動をするが、その一つとして農地で出来た農産物の加工

- ・流通・消費に関する活動を含めて行う。ここでは、複合的な事業や産消連帯ネットワークの事業がおこなわれる。
- ・農協・生協とも共生し、行政とも連携を取りつつ地域起こしとして、進める。
- ・農の腕を身に付けるため、ファーム・ワーカー講座を開催する。参加者には、「農の知識を知り農業技術を理解する」「農の体験をし農業技能を身につける」ことを通し、「自然と社会の中における農を知り、農の心を目覚めさせる」



- ・栽培すべき野菜は、多品種であって、その組み合わせを野々市ミックスと称します。野々市ミックスは、地質・気候・土作り・地域での野菜嗜好・流通の計画・農作業の計画と整合性をとって、土地の農家・高齢者・研究者との交流・連携の中で決定します。
- ・農作業は、農業に興味と関心のある様々な人たちの細切れで楽しい作業を組み合わせ、一定の安定的な規模と質を維持し続ける農園を実現しようとするものです。この企画に参加する人たちの農作業において持つべき心がけは、生真面目な真剣さと好奇心に満ちた遊び心と自然に対する柔らかい心の結合であります。

- ・本企画においては、農業に関わるすべてのことはカネに換算できるとか、そうすべきであるとかに拘らないようにしたいと思います。それでも事業の経済性は必要です。この経済性は、参画する人や関与する人が自らカネに換算できない部分を敏感に感じとり対処できるようにする、自然にそうなるような条件作りが望まれています。
- ・このような経済性の(有用性、公共性といってもよい)感覚は、今後の農業に不可欠となってくるでありましょう。そしてこのことは、ファーム・ワーカー講座の重要なテーマとなることでしょう。

・農家の人たちは、自分の家庭で食べるための野菜は、無農薬有機肥料の露地栽培によって、多様な組み合わせで季節に応じて作っています。農家の人たちは、このときには儲けのことも考えず、農業は経済原理に従うべきだなどということは全く頭にありません。自分の労働をカネに換算することもない。ただ、おいしい野菜を食べたいと思っているだけでしょう。

本企画は、このように農家が単独でやっていることをみんなでやってみようという単純な発想から出発しています。

1軒では何にも問題なくやれる。

2軒でも出来る。

10軒なら問題が出てくるか？

100軒なら不可能なのか？

いわば食料の自給自足を具体的にはじめようというような気持ちです。

・「市場メカニズムに合致しない非営利組織抜きに産業政策は成り立たない。」

このことは、農業で特に顕著に現れてくるであろうとおもわれます。

本企画は、営利農業に対する対抗軸としての非営利の協同農園の提案であるといえます。

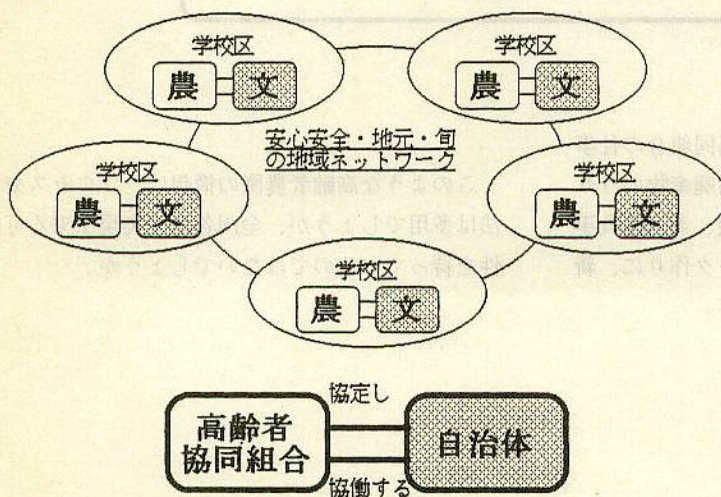
高齢者農園への展望

粕屋事業団の老人給食は、1人暮らしのお年寄りの食事を保障しようと17年前に始められたものですが、当初から無農薬有機肥料による野菜栽培の農園と一体のものとして運営されてきました。この取組みは、地域の高齢者を対象とする給食事業としても、無農薬有機農業への取組としても、そして、それを組み合わせた取組としても労働者協同組合としては初めての挑戦でありました。

この粕屋の例は、上述した非営利・協同農園の先駆的な試みであったともいえます。そして、この給食事業の赤字、農園経営におけるボランティア的労働の歴史は、こうした事業の困難さを如実に示しています。また、こうした事業において、地域との連携や行政からの支援の確保が重要であることを教えてくれています。

10月9、10日に行なわれた労協連合会の食・農事業推進会議において、粕屋の竹森さんは、粕屋モデルの発展形態として「学校区ごとに高齢者農園を開き、学校給食のための安心安全・地元・旬の野菜を提供する」という話をされました。

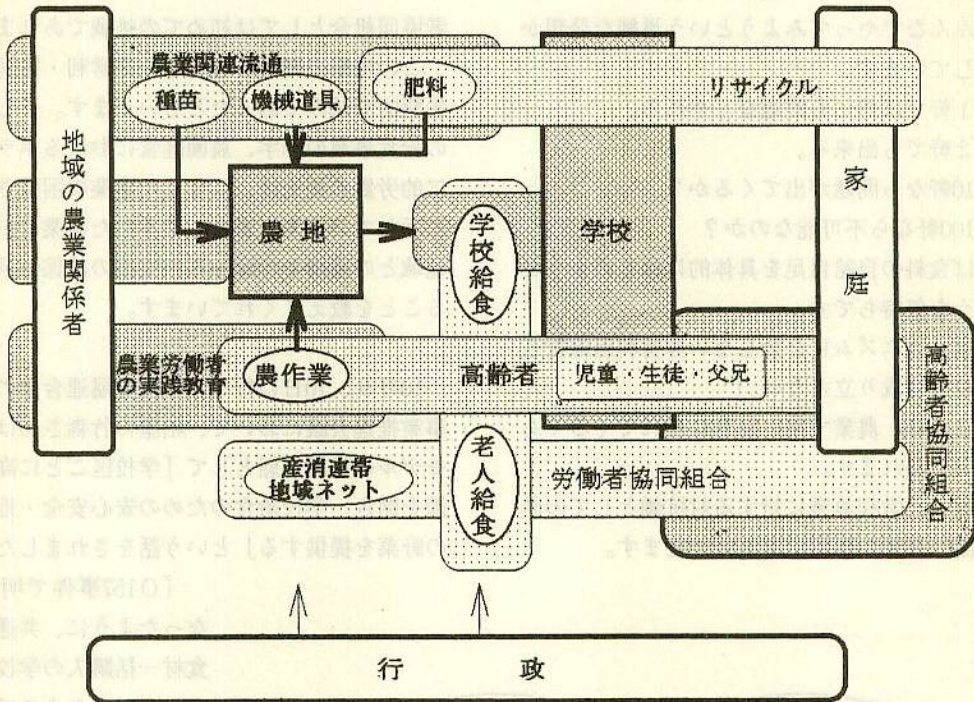
「O157事件で明らかになったように、共通献立・食材一括購入の学校給食システムはこのままではいけない。危険な域外食品から地域の子供たちを守らなければならない。この農園では、高齢者が働き子供たちに地元の安全で美味しい野菜を提供出来る。この程度のことは、地域がやって当然のことである。地域の子供たちに自分たちが作った野菜を食べてもらうことが出来なくて何が地域だ、何が自治体か。こうした高齢者農園を経営すれば、学校



給食の食材が改善されるだけでなく、高齢者も元気になる、児童・生徒は農業に親しみ、高齢者との交流も出来、教育上でもメリットがあるだろう。地元の農地が有効活用される、地元の食糧自給率が向上する、結局地域が活性化することにつながるだろう。こうした仕組みを作り農地を用意することは自治体に求めるのであるが、少しはカ

ネがかかるだろう。しかし、沢山のメリットがあるのだし、高齢者は元気になって医療費が減るなどのことを考えると、トータル自治体としても有効な仕組みではないか。」という話でした。

・この高齢者農園の構想を、前述の非営利・協同農園の場合と同じ形で省略化して図示すると、下図のようになるのでしょうか。



高齢者協同組合あるいは労働者協同組合の仕事おこしということからいえば、生活廃棄物のリサイクルを含めた農業、学校給食事業、老人給食事業および産消連帯の地域ネットワーク作りに、新たな展望を持つことが期待出来ます。

このような高齢者農園の構想は、プロセスや方法は多用でしょうが、全国各地で実現出来る可能性を持っているのではないのでしょうか。